

Contents

1	初めての駅	2
2	窓際のトットちゃん	4
3	新しい学校	9
4	気に入ったわ	10
5	校長先生	12
6	お弁当	16
7	今日から学校に行く	18
8	電車の教室	21
9	授業	23
10	海のものや山のもの	26
11	よく噛めよ	30

Chapter1 初めての駅

じゅう おか えき おおいまちせん お
自由が丘の駅で、大井町線から降りると、ママは、トットちゃんの手を引っ張って、
かいさつぐち で
改札口を出ようとした。トットちゃんは、それまで、あまり電車に乗ったことがなかったから、大切に握っていた切符をあげちゃうのは、もったいないなと思った。

そこで、かいさつぐちのおじさんに、「このきっぷ、もらっちゃいけない？」と聞いた。おじさんは「ダメだよ」というと、トットちゃんの手から、きっぷとあ
改札口の箱にいっぱい溜まっている切符をさして聞いた。「これ、ぜんぶ、おじさんの？」おじさんは、ほかでいひときっぷ
他の出て行く人の切符をひったくりながら答えた。「おじさんのじゃないよ、えき
駅のだから」「へーえ……」トットちゃんは、みれん
未練がましく、はこ のぞ こ
箱を覗き込みながら言った。「わたし おとな
私、大人になったら、きっぷ うひと
切符を売る人になろうと思うわ」おじさんは、はじめて、トットちゃんをチラリと見て、いった。「うちの おとこ こ えき はたら
うちの男の子も、駅で働きたいって、いってるから、いっしょにやるといいよ」

トットちゃんは、すこ はな
少し離れて、おじさんを見た。おじさんはふと
肥っていて、めがね
眼鏡をかけていて、よくみると、やさしそうなところもあった。「ふん……」トットちゃんは、手
を腰に当てて、かんさつ
観察しながら言った。「おじさんとこのこ
子と、いっしょ
一緒にやってもいいけど、かんが
考 えとくわ。あたし、これから あたら がっこう い
新しい学校に行くんで、忙しいから」そういうと、トットちゃんは、ま
待ってるママのところに走っていった。そして、こうさけ
叫んだ。「わたし
私、きっぷや
切符屋さんになろうと思うんだ！」ママは、おどろ
驚きもしないで、いった。「でも、スパイ
になるって言ってたのは、どうするの？」

トットちゃんは、ママに て と
手を取られてあるだ
歩き出しながら、かんが
考えた。(そうだわ。きのう
までは、ぜったい
絶対にスパイになろう、って決めてたのに。でも、いまのきっぷ
切符をいっぱい箱にしまっておく人になるのも、とても、いいと思うわ)「そうだ！」トットちゃんは、いい
ことを思いついて、ママの かお
顔をのぞきながら、おおごえ
大声をはりあげていった。「ねえ、ほんとう
本当はスパイなんだけど、きっぷや
切符屋さんなのは、どう？」ママはこた
答えなかった。

ほんとう
本当のことを言うと、ママはとてもふあん
不安だったのだ。もし、これから行く い しょうがっこう
小学校で、トットちゃんのことを、あずかってくれなかったら……。ちい はな
小さい花のついた、フェ

ルトの帽子をかぶっている、ママの、きれいな顔が、少しまじめになった。そして、道を飛び跳ねながら、何かを早口でしゃべってるトットちゃんを見た。トットちゃんは、ママの心配を知らなかったから、顔があうと、うれしそうに笑っていった。「ねえ、私、やっぱり、どっちもやめて、チンドン屋さんになる！！」ママは、多少、絶望的な気分と言った。「さあ、遅れるわ。校長先生が待ってらっしゃるんだから。もう、おしゃべりしないで、前を向いて、歩いてちょうだい」二人の目の前に、小さい学校の門が見えてきた。

Chapter2 窓際のトットちゃん

あたらしい学校^{がっこう}の門^{もん}をくぐる前^{まえ}に、トットちゃん^{ねん}のママが、なぜ不安^{ふあん}なのかを説明^{せつめい}すると、それはトットちゃんが、小学校^{しょうがっこう}一年^{ねん}なのにかかわらず、すでに学校^{がっこう}を退学^{たいがく}になったからだった。一年生^{いちねんせい}で!!

つい先週^{せんしゅう}のことだった。ママはトットちゃん^{ねん}の担任^{たんになん}の先生^{せんせい}に呼ばれて、はっきり、こういわれた。

「お宅^{たく}のお嬢^{じょう}さんがいると、クラス^{じゅう}中の迷惑^{めいわく}になります。よその学校^{がっこう}にお連れください!」若くて美しい女^{わか}の先生^{うつく}は、ため息^{おんな}をつきながら、繰り返し^{せんせい}した。「本当に^{いき}困^くってるんです!」ママはびっくりした。(一体^く、どんなこと^{かえ}を……。クラス^{ほんとう}中の迷惑^{じゅう}になる、どんなこと^{めいわく}を、あの子^こがするんだろうか……)

先生^{せんせい}は、カールしたまつ毛^げをパチパチさせ、パーマのかかった短い内巻^{みじか}の毛^{うちまき}を手でなでながら説明^{せつめい}に取り掛^とかった。

「まず、授業^{じゅぎょう}中に、机^{つくえ}のフタを、百ぺんくらい、あけたり閉めたりするんです。そこで私^{わたし}が、用事^{ようじ}がないのに、開けたり閉めたりしてはいけませんと申しますと、お宅^{たく}のお嬢^{じょう}さんは、ノートから、筆箱^{ふでばこ}、教科書^{きょうかしょ}、全部^{ぜんぶ}を机^{つくえ}の中にしまっけてしまっけて、一つ一つ取り出すんです。たとえば、書き取り^かをしますとしますね。するとお嬢^{じょう}さんは、まずフタを開けて、ノートを取り出した、と思うが早いか、パタン! とフタを閉めてしまいます。そして、すぐにまた開けて頭^あを中^{あた}につっこんで筆箱^{ふでばこ}から“ア”を書いための鉛筆^{えんぴつ}を出すと、急いで閉めて、“ア”を書きます。ところが、うまく書けなかったり間違えたりしますね。そうすると、フタを開けて、また頭^あを突っ込んで、消しゴム^けをだし、閉めると、急いで消しゴム^{いそ}を使い、次に、すごい早さ^{はや}で開けて、消しゴム^けをしまっけて、フタを閉めてしまいます。で、すぐ、また開けるので見てますと、“ア”ひとつだけ書いて、道具^{どうぐ}をひとつひとつ、全部^{ぜんぶ}しまっけてしまいます。鉛筆^{えんぴつ}をしまい、閉めて、また開けてノート^しをしまっけて……というふうに。そして、次の“イ”^{つぎ}のときに、また、ノートから始^{はじ}まって、鉛筆^{えんぴつ}、消しゴム^け……その度^{たび}に、私^{わたし}の目の前^めで、目まぐるしく、机^めのフタ^{つくえ}が開いたり閉まったり。私^{わたし}、目^めが回るんです。でも、一応^{いちおう}、用事^{ようじ}があるんですから、

いけないとは申せませんが……」先生のまつ毛が、その時を思い出したように、パチパチと早くなった。

そこで聞いて、ママには、トットちゃんが、なんで、学校の机を、そんなに開けたり閉めたりするのか、ちょっとわかった。というのは、初めて学校に行き帰ってきた日に、トットちゃんが、ひどく興奮して、こうママに報告したことを思い出したからだ。「ねえ、学校って、すごい。家の机の引き出しは、こんな風に、引っ張るのだけど、学校のはフタが上にあがる。ゴミ箱のフタと同じなんだけど、もっとツルツルで、いろんなものが、しまえて、とってもいいんだ！」ママには、今まで見たことのない机の前で、トットちゃんが面白がって、開けたり閉めたりしてる様子が目に見えるようだった。そして、それは、(そんなに悪いことではないし、第一、だんだん馴れてくれば、そんなに開けたり閉めたりしなくなるだろう)と考えたけど、先生には、「よく注意しますから」といった。ところが、先生には、それまでの調子より声をもうすこし高くして、こういった。「それだけなら、よろしいんですけど！」ママは、すこし身がちぢむような気がした。先生は、体を少し前にのり出すといった。「机で音を立ててないな、と思うと、今度は、授業中、立ってるんです。ずーっと！」ママは、またびっくりしたので聞いた。「立ってるって、どこにでございましょうか？」先生はすこし怒った風にいった。「教室の窓のところですよ！」ママは、わけが分からないので、続けて質問した。「窓のところで、何をしてるんでしょうか？」先生は、半分、叫ぶような声で言った。「チンドン屋を呼び込むためです。」

先生の話を、まとめて見ると、こういうことになるらしかった。一時間目に、机をパタパタを、かなりやると、それ以後は、机を離れて、窓のところに立って外を見ている。そこで、静かにしてしてくれるのなら、立っててもいい、と先生が思った矢先に、突然、トットちゃんは、大きい声で「チンドン屋さん！」と外に向かって叫んだ。だいたい、この教室の窓というのが、トットちゃんにとっては幸福なことに、先生にとっては不幸なことに、1階にあり、しかも通りは目の前だった。そして境といえ、低い、生垣があるだけだったから、トットちゃんは、簡単に、通りを歩いてる人と、話ができるわけだったのだ。さて、通りかかったチンドン屋さんは、呼ばれたか

ら教室の下まで来る。するとトットちゃんは、うれしそうに、クラス中の皆に呼びかけた。「来たわよー」。勉強してたクラス中の子供は、全員、その声で窓のところに、詰め掛けて、口々に叫ぶ。「チンドン屋さん」。すると、トットちゃんは、チンドン屋さんに頼む。「ねえ、ちょっとだけで、やってみて？」学校のそばを通る時は、音をおさえめにしているチンドン屋さんも、せっかくの頼みだからというので盛大に始める。クラスネットや鉦や太鼓や、三味線で。その間、先生がどうしてるか、といえ
ば、一段落つくまで、ひとり教壇で、ジーっと待ってるしかない。(この一曲が終わるまでの辛抱なんだから)と自分に言い聞かせながら。

さて、一曲終わると、チンドン屋さんは去って行き、生徒たちは、それぞれの席にもどる。ところが、驚いたことに、トットちゃんは、窓のところから動かない。「どうして、まだ、そこにいるのですか？」という先生の問いに、トットちゃんは、大真面目に答えた。「だって、また違うチンドン屋さんが来たら、お話しなきゃならないし。それから、さっきのチンドン屋さんが、また、戻ってきたら、大変だからです。」

「これじゃ、授業にならない、ということが、おわかりでしょう？」話してるうちに、先生は、かなり感情的になってきて、ママに言った。ママは、(なるほど、これでは先生も、お困りだわ)と思いかけた。とたん、先生は、また一段と大きな声で、こういった。「それに……」ママはびっくりしながらも、情けない思い出先生に聞いた。「まだ、あるんでございましょうか……」先生は、すぐいった。「“まだ”というように、数えられるくらいなら、こうやって、やめていただきたい、とお願いはしません!!」それから先生は、少し息を静めて、ママの顔を見て言った。「昨日のことですが、例によって、窓のところに立っているのも、またチンドン屋だと思って授業をしておりましたら、これが、また大きな声で、いきなり、『何してるの?』と、誰かに、何かを聞いているんですね。相手は、私のほうから見えませんが、誰だろう、と思っておりますと、また大きな声で、『ねえ、何をしてるの?』って。それも、今度は、通りにでなく、上のほうに向かって聞いてるんです。私も気になりまして、相手の返事が聞こえるかした、と耳を澄ましてみましたが、返事がないんです。お嬢さんは、それでも、さかんに、『ねえ、何してるの?』を続けるので、授業にもさしさわりがあるので、窓のと

ころに行^いって、お嬢^{じょう}さん^{はな}の話^{あいて}しかけてる相手^{だれ}が誰^みなのか、見てみようと思^{おも}いました。
窓^{まど}から顔^{かお}を出^だして上^{うへ}を見^みましたら、なんと、つばめが、教室^{きょうしつ}の屋根^{やね}の下^{した}に、巣^すを作^{つく}
ているんです。その、つばめに聞^きいてるんですね。そりゃ私^{わたし}も、子供^{こども}の気持^{きもち}ちが、分^わ
からないわけじゃありませんから、つばめに聞^きいてることを、馬鹿^{ばか}げている、とは申し
ません。授業^{じゅぎょう}中^{ちゅう}に、あんな声^{こえ}で、つばめに、『何^{なに}をしてるのか?』と聞^きかなくてもいい
と、私^{わたし}は思^{おも}うんです」そして先生^{せんせい}は、ママが、一体^{いったい}なんとお詫^わびをしよう、と口^{くち}を
開^あきかけたのより、早^{はや}く言^いった。「それから、こういうことも、ございました。初^{はじ}めて
の図画^{ずが}の時間^{じかん}のことですが、国旗^{こっき}を描^{えが}いて御覧^{ごらん}なさい、と私^{わたし}が申しましたら、他^{ほか}の子^こ
は、画用紙^{がようし}に、ちゃんと日^ひの丸^{まる}を描^{えが}いたんですが、お宅^{たく}のお嬢^{じょう}さんは、朝日新聞^{あさひしんぶん}の
模様^{もよう}のような、軍艦旗^{ぐんかんき}を描^{えが}き始め^{はじ}めました。それなら、それでいい、と思^{おも}ってましたら、
突然^{とつぜん}、旗^{はた}の周^{まわ}りに、ふさを、つけ始め^{はじ}めたんです。ふさ。よく青年団^{せいねんだん}とか、そういった
旗^{はた}についてます。あの、ふさです。で、それも、まあ、どこかで見^みたのだろうから、と
思^{おも}っておりました。ところが、ちょっ^めと目^めを離^{はな}したキスに、まあ、黄色^{きいろ}のふさを、机^{つくえ}に
まで、どん^{えが}どん描^{えが}いちゃってるんです。だいたい画用紙^{がようし}に、ほぼいっばいに旗^{はた}を描^{えが}いた
んですから、ふさの余裕^{よゆう}は、もともと、あまりなかったんですが、それに、黄色^{きいろ}のクレ
ヨンで、ゴシゴシふさを描^{えが}いたんですね。それが、はみ出^だしちゃって、画用紙^{がようし}をどかし
たら、机^{つくえ}に、ひどい黄色^{きいろ}のギザギザが^{のこ}残^{のこ}ってしま^{のこ}って、ふいても、こすっても、とれま
せん。まあ、幸^{さいわ}いなことは、ギザギザが三方向^{さんほう}だけだった、ってことでしょうか？」マ
マは、ちぢこまりながらも、急^{いそ}いで質^{しつもん}問^{もん}した。「三方向^{さんほう}っていうのは……」先生^{せんせい}は、そ
ろそろ疲^{つか}れてきた、という様子^{ようす}だったが、それでも親^{しんせつ}切^{せつ}にい^{はた}った。「旗竿^{はたざお}を左^{ひだり}は^{はじ}に
描^{えが}きましたから、旗^{はた}のギザギザは、三方向^{さんほう}だけだったんでございます」ママは、少し助^{すこ}
かった、と思^{おも}って、「はあ、それで三方向^{さんほう}だけ……」とい^{せんせい}った。すると、先生^{せんせい}は、次^{つぎ}に、
と^{くちよう}っても、ゆ^{ひとこと}っくりの口調^{くちよう}で、一^く言^ぎずつ区切^かって「ただし、その代^{はたざお}わり、旗竿^{はたざお}のは^{はじ}
が、やはり、机^{つくえ}に、はみ出^だして、残^{のこ}っております!!」それから先生^{せんせい}は立^たち上^あがると、か
なり冷^{つめ}たい感^{かん}じで、とどめをさすように言^いった。「それと、迷^{めい}惑^{わく}しているのは、私^{わたし}だけ
ではございませ^{となり}ん。隣^いの一年生^{いちねんせい}の受^うけ持^もちの先生^{せんせい}もお困^{こま}りのことが、あるそうですか
ら……」ママは、決^{けっしん}心^{しん}しないわけには、い^{たし}かなか^{ほか}った。(確^{たし}かに、これ^{ほかに}じゃ、他^{せい}の生徒^と)

さんに、ご迷惑^{めいわく}すぎる。どこか、他の学校^{ほかに がっこう さが}を探して、移^{うつ}したほうが、よさそうだ。何とか、あの子^この性格^{せいかく}がわかっていただけて、皆^{みな}と一緒^{いっしょ}にやっ^{おし}ていくことを教えてくださるような学校^{がっこう}に……) そうして、ママが、あっちこっち、かけずりまわって見^みつけたのが、これから行^いこうとしている学校^{がっこう}、というわけだったのだ。ママは、この退学^{たいがく}のことを、トットちゃんに話^{はな}していなかった。話^{はな}しても、何^{なに}がいけなかったのか、わからないだろうし、また、そんなにことで、トットちゃんが、コンプレックスを持^もつのも、よくないと思^{おも}ったから、(いつか、大き^{おお}くなったら、話^{はな}しましょう) と、きめていた。ただ、トットちゃんには、こうい^いった。「新^{あた}しい学校^{がっこう}に行^いってみない? いい学校^{がっこう}だって話^{はなし}よ」トットちゃんは、少^{すこ}し考^{かん}えてから、言^いった。「行^いくけど……」ママは、(この子^こは、今何^{いまなに}を考^{かん}えてるのだろうか) と思^{おも}った。(うすうす、退学^{たいがく}のこと、気^きがついていたんだろうか……) 次^{つぎ}の瞬^{しゅん}間^{かん}、トットちゃんは、ママの腕^{うで}の中^{なか}に、飛^とび込^こんで来^きて、い^いった。「ねえ、今度^{こんど}の学校^{がっこう}に、いいチンドン屋^やさん、来^くるかな?」とにかく、そんなわけ^{わけ}で、トットちゃんとママは、新^{あた}しい学校^{がっこう}に向^むかって、歩^{ある}いているのだった。

Chapter3 新しい学校

学校の門が、はっきり見えるところまで来て、トットちゃんは、立ち止った。なぜなら、この間まで行っていた学校の門は、立派なコンクリートみたいな柱で、学校の名前も、大きく書いてあった。ところが、この新しい学校の門ときたら、低い木で、しかも葉っぱが生えていた。

「地面から生えてる門ね」

と、トットちゃんはママに言った。そうして、こう、付け加えた。

「きっと、どんだんはえて、今に電信柱より高くなるわ」

確かに、その二本の門は、根っこのある木だった。トットちゃんは、門に近づくと、いきなり顔を、斜めにした。なぜかといえば、門にぶら下げてある学校の名前を書いた札が、風に吹かれたのか、斜めになっていたからだった。

「トモエがくえん」トットちゃんは、顔を斜めにしたまま、表札を読み上げた。そして、ママに、

「トモエって、なあに？」

と聞こうとしたときだった。トットちゃんの目の端に、夢としか思えないものが見えたのだった。トットちゃんは、身をかがめると、門の植え込みの、隙間に頭を突っ込んで、門の中をのぞいてみた。どうしよう、みえたんだけど！

「ママ！ あれ、本当の電車？ 校庭に並んでるの」

それは、走っていない、本当の電車が六台、教室用に、置かれてあるのだった。トットちゃんは、夢のように思った。“電車の教室……”

電車で窓が、朝の光を受けて、キラキラと光っていた。目を輝かして、のぞいているトットちゃんの、ホッペタも、光っていた。

Chapter4 気に入ったわ

つぎ しゅんかん 次の間、トットちゃんは、「わーい」と歓声^{かんせい}を^あ上げると、電車^{でんしゃ}の教室^{きょうしつ}のほうむ向^むかって走り出^{はし}した。そして、走りながら、ママに向^むかって叫^{さけ}んだ。

「ねえ、早く、動^{うご}かない電車^{でんしゃ}に乗^のてみよう！」

ママは、驚^{おどろ}いて走り出^{はし}した。もとバスケットボールの選手^{せんしゅ}だったママの足^{あし}は、トットちゃんより速^{はや}かったから、トットちゃんが、後^{あと}、ちょっとでドア、というときに、スカートを捕^{つか}まえられてしまった。ママは、スカートのはしを、ぎっちり握^{にぎ}ったまま、トットちゃんにいった。

「ダメよ。この電車^{でんしゃ}は、この学校^{がっこう}のお教室^{きょうしつ}なんだし、あなたは、まだ、この学校^{がっこう}に入^いれていただいてないんだから。もし、どうしても、この電車^{でんしゃ}に乗りた^のいんだったら、これからお目^めにかかる校^{こう}長^{ちやう}先生^{せんせい}とちゃんと、お話^{はな}してちょうだい。そして、うまくいったら、この学校^{がっこう}に通^{かよ}えるんだから、わ^わかった？」

トットちゃんは、（今^{いま}乗^のれないのは、とても残念^{ざんねん}なことだ）と思^{おも}ったけど、ママのいう通^{とお}りにしようときめたから、大^{おお}きな声^{こえ}で、

「うん」

といって、それから、いそいで、つけたした。

「わたし、この学校^{がっこう}、とっても気^きに入^いったわ」

ママは、トットちゃんが気^きに入^いったかどうかより、校^{こう}長^{ちやう}先生^{せんせい}が、トットちゃんを気^きに入^いってくださるかどうかが問題^{もんだい}なのよ、といたい気がしたけど、とにかく、トットちゃんのスカートから手^てを離^{はな}し、手^てをつないで校^{こう}長^{ちやう}室^{しつ}のほうに歩^{ある}き出^だした。

どの電車^{でんしゃ}も静^{しず}かで、ちょっと前^{まえ}に、一時間^{じかん}目の授^{じゅ}業^{ぎやう}が始^{はじ}まったようだった。あまりひろくない校庭^{こうてい}の周り^{まわ}には、塀^{へい}の変^かわりに、いろんな種^{しゅ}類^{るい}の木^きが植^うわっていて、花壇^{かだん}には、赤^{あか}や黄^{きいろ}色^{はな}の花^さがいっぱい咲^さいていた。

校^{こう}長^{ちやう}室^{しつ}は、電車^{でんしゃ}ではなく、ちやうど、門^{もん}から正^{しょう}面^{めん}に見^みえる扇^{おうぎ}形^{がた}に広^{ひろ}がった七段^{しちだん}くらいある石^{いし}の階^{かい}段^{だん}を上^{のぼ}った、その右^{みぎ}手^てにあ^あった。

トットちゃんは、ママの手^てを振り切^きると、階^{かい}段^{だん}を駆^かけ上^あがって行^いったが、急^{きゅう}に止^とまっ

て、振り向いた。だから、後ろから行ったママは、もう少しで、トットちゃんと正面衝突するところだった。

「どうしたの？」

ママは、トットちゃんの気が変わったのかと思って、急いで聞いた。トットちゃんは、ちょうど階段の一番うえに立った形だったけど、まじめな顔をして、小声でママに聞いた。

「ねえ、これからあいに行く人って、駅の人なんじゃないの？」

ママは、かなり辛抱づよい人間だったから……というか、面白がりやだったから、やはり小声になって、トットちゃんに顔をつけて、聞いた。

「どうして？」

トットちゃんは、ますます声をひそめて言った。

「だってさ、校長先生って、ママいったけど、こんなに電車、いっぱい持ってるんだから、本当は、駅の人なんじゃないの？」

確かに、電車の払い下げを校舎にしている学校なんてめずらしいから、トットちゃんの疑問も、もっとものこと、とママも思ったけど、この際、説明してるヒマはないので、こういった。

「じゃ、あなた、校長先生に伺って御覧なさい、自分で。それと、あなたのパパのことを考えてみて？ パパはヴァイオリンを弾く人で、いくつかヴァイオリンを持ってるけど、ヴァイオリン屋さんじゃないでしょう？ そういう人もいるのよ」トットちゃんは、「そうか」というと、ママと手をつないだ。

Chapter5 校長先生

トットちゃんとママが入っていくと、部屋の中にいた男の人が椅子から立ち上がった。その人は、頭の毛が薄くなっていて、前のほうの歯が抜けていて、顔の血色がよく、背はあまり高くないけど、肩や腕が、がっちりしていて、ヨレヨレの黒の三つ揃いを、キチンと着ていた。

トットちゃんは、急いで、お辞儀をしてから、元気よく聞いた。

「校長先生か、駅の人か、どっち？」

ママが、慌てて説明しよう、とするまえに、その人は笑いながら答えた。

「校長先生だよ」

トットちゃんは、とってもうれしそうに言った。

「よかった。じゃ、おねがい。私、この学校にいたいのに」

校長先生は、椅子をトットちゃんに勧めると、ママのほうを向いて言った。

「じゃ、僕は、これからトットちゃんと話がありますから、もう、お帰り下さって結構です」

ほんのちょっとの間、トットちゃんは、少し心細い気がしたけど、なんとなく、(この校長先生ならいいや)と思った。ママは、いさぎよく先生にいった。

「じゃ、よろしく、お願いします」

そして、ドアを閉めて出て行った。

校長先生は、トットちゃんの前に椅子を引っ張ってきて、とても近い位置に、向かい合わせに腰をかけると、こういった。

「さあ、何でも、先生に話してごらん。話したいこと、全部」

「話したいこと!？」

(なにか聞かれて、お返事するのかな?) と思っていたトットちゃんは、「何でも話していい」と聞いて、ものすごくうれしくなって、すぐ話し始めた。順序も、話し方も、少しグチャグチャだったけど、一生懸命に話した。

今乗ってきた電車が速かったこと。

えき かいさつぐち 駅の改札口のおじさんに、おねが ねが お願いしたけど、きつぷ 切符をくれなかったこと。

まえ い 前に行ってた学校の受け持ちの女の先生は、かお 顔がきれいだということ。

その学校には、つばめのす 巣があること。

いえ 家には、ロッキーという ちゃいろ 茶色の犬がいて“お手”と“ごめんくださいませ”と、ごはん 飯の後で、まんぞく 満足、まんぞく 満足”ができること。

ようちえん 幼稚園のとき、ハサミを口の中に入れて、チョキチョキやると、「した 舌をき 切ります」と先生がいか 怒ったけど、なんかい 何回もやっちゃったってということ。

はな 涙が出てきたときは、いつまでも、ズルズルやってると、ママにしかられるから、なるべく早くかむこと。

パパは、うみ およ 海で泳ぐのがじょうず 上手で、と こ 飛び込みだってで き 出来ること。

こういったことを、つぎ つぎ 次から次と、トットちゃんははな はな 話した。先生は、わら 笑ったり、うな ずいたり、「それから?」とかいったりしてくださったから、うれしくて、トットちゃんは、いつまでもはな はな 話した。でも、とうとう、はなし はなし 話がなくなった。トットちゃんは、口をつぐんで かんが 考えていると、先生はいった。

「もう、ないかい?」

トットちゃんは、これでおしまいにしてしまうのは、ざんねん 残念だと思った。

せっかく、はなし はなし 話を、いっぱい聞いてもらう、いいチャンスなのに。

(なにか、はなし はなし 話は、ないかなあ……)

あたま 頭の中が、いそが 忙しくうご 動いた。おも 思ったら、「よかった!」。はなし はなし 話が見つかった。

それは、その日、トットちゃんがき 着てるようふく 洋服のことだった。たいがいのようふく 洋服は、ママがてせい てせい 手製でつく 作ってくれるのだけれど、きょう 今日は、か 買ったものだった。というのも、なにしろトットちゃんがゆうがた 夕方、そと 外からかえ 帰ってきたとき、どのようふく 洋服もビリビリで、ときには、ジャキジャキのときもあったし、どうしてそうなるのか、ママにもぜったい 絶対わからないのだけれど、白いもめん もめん 木綿でゴム入りのパンツまで、ビリビリになっているのだから。トットちゃんのはなし はなし 話によると、よそのいえ いえ 家の庭をつつきってかきね 垣根をもぐったり、はら はら 原っぱのてつじょうもう 鉄条網をくぐるとき、「こんなになっちゃうんだ」ということなのだけれど、とにかく、そんなぐあい 具合で、けっきょく 結局、け さ いえ 今朝、家をでるとき、てせい てせい ママの手製の、しゃれたのは、どれもビリビリ

で、仕方なく、前に買ったのを着てきたのだった。それはワンピースで、エンジとグレーの細かいチェックで、布地はジャージだから、悪くはないけど、衿にしてある、花の刺繍の、赤い色が、ママは、「趣味が悪い」といていた。そのことを、トットちゃんは、思い出したのだった。だから、急いで椅子から降りると、衿を手で持ち上げて、先生のそばに行き、こういった。

「この衿ね、ママ、嫌いなんだって!」

それをいってしまったら、どう考えてみても、本当に、話しはもう無くなった。トットちゃんは（少し悲しい）と思った。トットちゃんが、そう思ったとき、先生が立ち上がった。そして、トットちゃんの頭に、大きく暖かい手を置くと、

「じゃ、これで、君は、この学校の生徒だよ」

そういった。……その時、トットちゃんは、なんだか、生まれて初めて、本当に好きな人にあったような気がした。だって、生まれてから今日まで、こんな長い時間、自分の話を聞いてくれた人は、いなかったんだもの。そして、その長い時間の間、一度だって、あくびをしたり、退屈そうにしないで、トットちゃんが話してるのと同じように、身を乗り出して、一生懸命、聞いてくれたんだもの。

トットちゃんは、このとき、まだ時計が読めなかったんだけど、それでも長い時間、と思ったくらいなんだから、もし読めたら、ビックリしたに違いない。そして、もっと先生に感謝したに違いない。というのは、トットちゃんとママが学校に着いたのが八時で、校長室で全部の話が終わって、トットちゃんが、この学校の生徒になった、と決まったとき、先生が懐中時計を見て、「ああ、お弁当の時間だな」といったから、つまり、たっぷり四時間、先生は、トットちゃんの話聞いてくれたことになるのだった。

後にも先にも、トットちゃんの話、こんなにちゃんと聞いてくれた大人は、いなかった。

それにしても、まだ小学校一年生になったばかりのトットちゃんが、四時間も、一人でしゃべるぶんの話があったことは、ママや、前の学校の先生が聞いたら、きっと、ビックリするに違いないことだった。

このとき、トットちゃんは、まだ退学のことはもちろん、周りの大人が、手こずっ

てることも、気がついていなかったし、もともと性格も陽気で、忘れっぽいタチだったから、無邪気に見えた。でも、トットちゃんの中のどこかに、なんとなく、疎外感のような、他の子供と違って、ひとりだけ、ちょっと、冷たい目で見られているようなものを、おぼろげには感じていた。それが、この校長先生となると、安心して、暖かくて、気持ちよかった。

（この人となら、ずーっと一緒にいてもいい）これが、校長先生、小林宗作氏に、初めて遭った日、トットちゃんを感じた、感想だった。そして、有難いことに、校長先生も、トットちゃんと、同じ感想を、その時、持っていたのだった。

Chapter6 お弁当

トットちゃんは、校 長 先生に連れられて、みんなが、お弁当を食べるところを、見に行くことになった。お昼だけは、電 車 でなく、「みんな、講 堂 に集まることになっている」と校 長 先生が教えてくれた。講 堂 はさっきトットちゃんが上がってきた石の階 段 の、突き当たりにあった。いってみると、生徒たちが、大騒ぎをしながら、机 と椅子を、講 堂 に、まーるく輪になるように、並べているところだった。隅っこで、それを見ていたトットちゃんは、校 長 先生の上着を引っ張って聞いた。

「他の生徒は、どこにいるの？」

校 長 先生は答えた。

「これで全部なんだよ」

「全部!？」

トットちゃんは、信じられない気がした。だって、前の学校の一クラスと同じくらいしか、いないんだもの。そうすると、

「学校中で、五十人くらいなの？」

校 長 先生は、「そうだ」といった。トットちゃんは、なにもかも、前の学校と違ってると思った。

みんなが着 席 すると、校 長 先生は、

「みんな、海のもの、山のもの、もって来たかい？」

と聞いた。

「はい」

みんな、それぞれの、お弁当の、ふたを取った。

「どれどれ」

校 長 先生は、机 で出来た円の中に入ると、ひとりずつ、お弁当をのぞきながら、歩いている。

生徒たちは、笑ったり、キイキイいったり、にぎやかだった。

「海のもの、山のもの、って、なんだろう」

トットちゃんは、おかしくなった。でも、とっても、とっても、この学校は変わっ
ていて、面白^{おもしろ}そう。お弁当^{べんとう}の時間^{じかん}が、こんなに、愉快^{ゆかい}で、楽^{たの}しいなんて、知らなかつ
た。トットちゃんは、明日^{あした}からは、自分^{じぶん}も、あの机^{つくえ}に座^{すわ}って、『海^{うみ}のものと、山^{やま}のもの』
の弁当^{べんとう}を、校^{こう}長^{ちょう}先生^{せんせい}に見てもらうんだ、と思うと、もう、嬉^{うれ}しさと、楽^{たの}しさで、胸^{むね}が
いっぱいになり、叫^{さけ}びそうになった。お弁当^{べんとう}を、のぞきこんでる校^{こう}長^{ちょう}先生^{せんせい}の肩^{かた}に、お
昼^{ひる}の光^{ひかり}が、やわらかく止^とまっていた。

Chapter7 今日から学校に行く

きのう、「^{きょう}今日から、^{きみ}君は、もう、この学校の^{せいと}生徒だよ」、そう校^{こう}長^{ちやう}先生^いに言われたトットちゃんにとって、こんなに次の日^{つぎ}が待ち^ま遠^どしい、ってことは、^{いま}今までになかった。だから、いつもなら朝^{あさ}、ママが叩^{たた}き起^おこしても、まだベッドの上でぼんやりしてることの多いトットちゃんが、この日ばかりは、誰^{だれ}からも起^おこされない^{まえ}前に、もうソックスまではいて、ランドセルを^せ背^お負^おって、みんなの起^おきるのを^ま待^まっていた。

この家^{いえ}の中で、いちばん、きちんと時間^{じかん}を守るシェパードのロッキーは、トットちゃんの、いつもと違う行^{ちが}動^{こう}に、怪訝^{けげん}そうな目^むを向けながら、それでも、大きく伸^のびをしようと、トットちゃんにぴったりとくっついて、(何か始^{なに}まるらしい) ^{はじ}ことを^{きたい}期待^きした。

ママは大^{たい}変^{へん}だった。大^お忙^{いそ}しで、『海^{うみ}のものと山^{やま}のもの』のお弁^{べん}当^{とう}を作り、トットちゃんに朝^{あさ}ごはんを食^たべさせ、毛糸^{けいと}で編^あんだヒモを通^{とお}した、セルロイドの定期^{ていき}入れを、トットちゃん^{くび}の首^{くび}にかけた。これは定期^{ていき}を、なくさないためだった。パパは

「いい子でね」

と^{あたま}頭^{あたま}をモシャモシャにしたまま^い言^いった。

「もちろん!」

と、トットちゃんは言^いうと、玄関^{げんかん}で靴^{くつ}を履^はき、戸^とを開^あけると、クルリと家^{いえ}の中^むを向^むき、丁寧^{ていねい}にお辞儀^{じぎ}をして、こういった。

「みなさま、行^いってまいります」

見送^{みおく}りに立^たっていたママは、ちょっと涙^{なみだ}がでそうになった。それは、こんなに生き生きとして行儀^{ぎょうぎ}よく、素直^{すなお}で、楽^{たの}しそうにしてるトットちゃんが、つい、このあいだ、「退学^{たいがく}になった」、ということをおも^{おも}だ^だしたからだった。(新^{あた}しい学校^{がっこう}で、うまくいくといい……) ママは心^{こころ}から^{いの}そう祈^{いの}った。

ところが、次の瞬^{つぎ}間^{しゅんかん}、ママは、飛^とび上^あがるほど驚^{おどろ}いた。というのは、トットちゃんが、せっかくママが首^{くび}からかけた定期^{ていき}を、ロッキーの首^{くび}にかけているのを見たからだった。ママは、(一^い体^{たい}どうなるのだろう?) と思^{おも}ったけど、だまって、成^なり行^ゆきを見ることにした。トットちゃんは、定期^{ていき}をロッキーの首^{くび}にかけると、しゃがんで、ロッキーに、

こういった。

「いい?この定期^{ていき}のヒモは、あんたに、あ^あ合わないのよ」

確かに、ロッキーにはヒモが^{なが}長く、定期^{ていき}は地面^{じめん}を引きずっていた。

「わかった? これは私^{わたし}の定期^{ていき}で、あんたのじゃないから、あんたは電車^{でんしゃ}に^の乗れないの。校^{こう}長^{ちやう}先生^きに聞いてみるけど、駅^{えき}の人にも。で『いい』っていったら、あんたも学校^こに来られるんだけど、どうかなあ」

ロッキーは、途中^{とちゆう}までは、耳^{みみ}をピンと立てて神^{しん}妙^{みやう}に聞いていたけど、説明^{せつめい}の終わりのところで、定期^{ていき}を、ちょっと、なめてみて、それから、あくびをした。それでも、トットちゃんは、一生^{いっしょう}懸命^{けんめい}に話^{はな}し続^{つづ}けた。

「電車^{でんしゃ}の教室^{きやうしつ}は、動^{うご}かないから、お教室^{きやうしつ}では、定期^{ていき}はいらないと思うんだ。とにかく、今日^{きょう}は持^もってるのよ」

たしかにロッキーは、今^{いま}まで、歩^{ある}いて通^{かよ}う学校^{もん}の門^{まい}まで、毎日^{まいにち}、トットちゃんと一緒^{いっしょ}に行^いって、後^{あと}は、一人^{ひとり}で家^{いえ}に帰^{かえ}ってきていたから、今日^{きょう}も、そのつもりでいた。

トットちゃんは、定期^{ていき}をロッキーの首^{くび}からはずすと、大切^{たいせつ}そうに自分^{じぶん}の首^{くび}にかけると、パパとママに、もう一度^{いちど}、『行^いってまいりまーす』という^いと、今度^{こんど}は振り返^ふらずに、ランドセルをカタカタいわせて走^{はし}り出^だした。ロッキーも、からだをのびのびさせながら、並^{なら}んで走^{はし}り出^だした。

駅^{えき}までの道^{みち}は、前^{まえ}の学校^いに行く道^{みち}と、ほとんど変^かわらなかった。だから、途中^{とちゆう}でトットちゃんは、顔見知^{かおみし}りの犬^{ねこ}や猫^{まねこ}や、前^{まえ}の同^{どう}級^{きゆう}生^{せい}と、すれ違^{ちが}った。トットちゃんは、その度^{たび}に、「定期^{ていき}を見せて、驚^{おどろ}かせてやろうかな?」と思^{おも}ったけど、(もし遅^{おそ}くなったら大^{たい}変^{へん}だから、今日^{きょう}は、よそう……) と決^きめて、どん^あどん歩^{ある}いた。

駅^{えき}のところ^きに来て、いつもなら左^{ひだり}に行くトットちゃんが、右^{みぎ}に曲^まがったので、可^{かわ}哀^{あい}そうにロッキーは、とても心配^{しんぱい}そうに立^たち止^{どま}って、キョロキョロした。トットちゃんは、改札口^{かいさつぐち}のところまで行^いったんだけど、戻^{もど}ってきて、まだ不思議^{ふしぎ}そうな顔^{かお}をしてるロッキーにいった。

「もう、前^{まえ}の学校^いには行^いかないのよ。新^{あた}しい学校^いに行くんだから」

それからトットちゃんは、ロッキーの顔^{かお}に、自分^{じぶん}の顔^{かお}をくっつけ、ついでにロッキー

の耳の中の、においをかいだ。(いつもと同じくらい、くさいけれど、私^{わたし}には、いい、に
おい!) そう思うと顔を離^{おも}して、^{かお}「バイバイ」というと、定期^{ていき}を駅^{えき}の人に見せて、ちょっと
高^{たか}い駅^{えき}の階^{かい}段^{だん}を、登^{のぼ}り始^{はじ}めた。ロッキーは、小^こさい声^{こえ}で鳴^ないて、トットちゃん^{かいだん}が階^{かい}段^{だん}
を上^みがっていくのを、いつまでも見送^{みおく}っていた。

Chapter8 電車の教室

トットちゃんが、きのう、校^{こう}長^{ちょう}先生^{せんせい}から教^{おし}えていただいた、自^じ分^{ぶん}の教^{きょう}室^{しつ}である、
電^{でん}車^{しゃ}のドアに手をかけたとき、まだ校^{こう}庭^{てい}には、誰^{だれ}の姿^{すがた}も見えなかった。今^{いま}と違^{ちが}って、
昔^{むかし}の電^{でん}車^{しゃ}は、外^{そと}から開^あくように、ドアに取^と手^てがついていた。両^{りょう}手^てで、その取^と手^てを持^もっ
て、右^{みぎ}に引^ひくと、ドアは、すぐ開^あいた。トットちゃんは、ドキドキしながら、そーっと、
首^{くび}を突^つっ込^こんで、中^{ちゅう}を見てみた。

「わあーい」

これなら、勉^{べん}強^{きやう}しながら、いつも旅^{りょ}行^{こう}をしるみたいじゃない。網^{あみ}柵^{だな}もあるし、
窓^{まど}も全^{ぜん}部^ぶ、そのままだし。違^{ちが}うところは、運^{うん}転^{てん}手^{しゅ}さんの席^{せき}のところに黒^{こく}板^{ばん}があるのと、
電^{でん}車^{しゃ}の長^{なが}い腰^{こしかけ}掛^{かけ}を、はずして、生^{せい}徒^と用^{よう}の机^{つくえ}と腰^{こしかけ}掛^{かけ}が進^{しん}行^{こう}方^{ほう}向^{こう}に向^むいて並^{なら}んでいる
のと、つり革^{かわ}が無^ないところだけ。後^{あと}は、天^{てん}井^{じょう}も床^{ゆか}も、全^{ぜん}部^ぶ、電^{でん}車^{しゃ}のままになっていた。
トットちゃんは靴^{くつ}を脱^ぬいで中^{ちゅう}に入り、誰^{だれ}でも腰^{こしかけ}掛^{かけ}ていたいくらい、気^き持^もちのいい椅子^{いす}
だった。トットちゃんは、うれしくて、(こんな気^きに入^いった学^{がく}校^{こう}は、絶^ぜ対^{たい}に、お休^{やす}みな
んかしないで、ずーっとくる)と、強^{つよ}く心^{こころ}に思^{おも}った。

それからトットちゃんは、窓^{まど}から外^{そと}を見ていた。すると、動^{うご}いていないはずの電^{でん}車^{しゃ}
なのに、校^{こう}庭^{てい}の花^{はな}や木^きが、少^{すこ}し風^{かぜ}に揺^ゆれているせいか、電^{でん}車^{しゃ}が走^{はし}っているような気^き持^も
ちになった。

「ああ、嬉^{うれ}しいなあー」

トットちゃんは、とうとう声^{こえ}に出^でして、そういった。それから、顔^{かお}をぺったりガラ
ス窓^{まど}にくっつけると、いつも、嬉^{うれ}しいとき、そうするように、デタラメ歌^{うた}を、うたいは
じめた。

とても うれし

うれし とても

どうしてかっていえば……

そこまで歌^{うた}ったとき、誰^{だれ}かが乗^のり込^こんできた。女^{おんな}の子^こだった。その子^こは、ノートと
筆^{ふで}箱^{ばこ}をランドセルから出^でして机^{つくえ}の上^{うへ}に置^おくと、背^せ伸^のびをし、網^{あみ}柵^{だな}にランドセルをの

せた。それから草履袋^{ぞうりぶくろ}も、のせた。トットちゃんは歌^{うた}をやめて、急い^{いそ}いで、まねをした。
つぎに、男の子が乗^のってきた。その子は、ドアのところから、バスケットボールのように、
ランドセルを、網^{あみ}柵^{だな}に投げ込んだ。網^{あみ}柵^{だな}の、網^{あみ}は、大きく波^{なみ}うつと、ランドセルを、投^な
げ出^だした。ランドセルは、床^{ゆか}に落^おちた。その男の子は、「失^し敗^{ぱい}!」という^しと、またもや、
同^{おな}じところから、網^{あみ}柵^{だな}めがけて、投^なげ込^こんだ。今^{こん}度は、うま^どく、おさ^{せい}まった。『成^{せい}功^{こう}!』
と、その子は叫^{さけ}ぶと、すぐ、「失^し敗^{ぱい}!」とい^つって、机^{つくえ}によ^のじ登^ぼると、網^{あみ}柵^{だな}のランドセル
を開^あけて、筆^ふ箱^{でばこ}やノートを出^でした。そうい^わうのを出^すすのを忘^{わす}れたから、失^し敗^{ぱい}だっ^たに
違^{ちが}い^がな^かった。

こうして、九^{せい}人の生^{せい}徒^とが、トットちゃん^{でんしゃ}の電^{でん}車^{しゃ}に^の乗^こり込^こんできて、それが、トモエ
学^{がく}園^{えん}の、一^{ぜん}年^{いん}生^{せい}の全^{ぜん}員^{いん}だ^{った}。

そしてそれは、同^{おな}じ電^{でん}車^{しゃ}で^{たび}旅^{りょ}を^なする、仲^{なか}間^まだ^{った}。

Chapter9 授業

お教室が本当の電車で、“かわってる”と思ったトットちゃんが、次に“かわってる”と思ったのは、教室で座る場所だった。前の学校は、誰かさんは、どの机、隣は誰、前は誰、と決まっていた。ところが、この学校は、どこでも、次の日の気分や都合で、毎日、好きなところに座っていいのだった。

そこでトットちゃんは、さんざん考え、そして見回したあげく、朝、トットちゃんの次に教室に入ってきた女の子の隣に座ることに決めた。なぜなら、この子が、長い耳をした兎の絵のついた、ジャンパースカートをはいていたからだった。

でも、なによりも“かわっていた”のは、この学校の、授業のやりかただった。

普通の学校は、一時間目が国語なら、国語をやって、二時間目が算数なら、算数、という風に、時間割の通りの順番なのだけど、この学校は、まるっきり違っていた。

何しろ、一時間目が始まるときに、その日、一日やる時間割の、全部の科目の問題を、女の先生が、黒板にいっぱい書きちゃって、

「さあ、どれでも好きなものから、始めてください」

といったんだ。だから生徒は、国語であろうと、算数であろうと、自分の好きなものから始めていっこうに、かまわないのだった。だから、作文の好きな子が、作文を書いていると、後ろでは、物理の好きな子が、アルコールランプに火をつけて、フラスコをブクブクやったり、何かを爆発させてる、なんていう光景は、どの教室でもみられることだった。この授業のやり方は、上級になるにしたがって、その子供の興味を持っているもの、興味の持ち方、物の考え方、そして、個性、といったものが、先生に、はっきり分かってくるから、先生にとって、生徒を知る上で、何よりの勉強法だった。

また、生徒にとっても、好きな学科からやっていい、というのは、嬉しいことだったし、嫌いな学科にしても、学校が終わる時間までに、やればいいのだから、何とか、やりくり出来た。従って、自習の形式が多く、いよいよ、分からなくなってくると、先生のところに聞きに行くか、自分の席に先生に来ていただいて、納得の行くまで、教えて

もらう。そして、例題^{れいだい}をもらって、また自習^{じしゅう}に入る。これは本当^{ほんとう}の勉強^{べんきょう}だった。だから、先生の^{はなし}話^{せつめい}や説明^きを、ボンヤリ聞^きく、といった事^{こと}は、無い^なにひとしかった。トットちゃん^{たち}達、一年生^{じしゅう}は、まだ自習^{べんきょう}をするほどの勉強^{はじ}を始めていなかったけど、それでも、自分の好きな科目^{じぶん す かもく}から勉強^{べんきょう}する、ということには、かわりなかった。カタカナ^かを書く子^こ、絵^えを描^かく子^こ。本^よを読^よんでる子^こ。中には、体操^{たいそう}をしている子^こもいた。トットちゃん^{となり}の隣^りの女の子^なは、もう、ひらがなが書^かけるらしく、ノート^{うつ}に写^{うつ}していた。トットちゃん^{なに}は、何もかもが珍^{めづら}しくて、ワクワクしちゃって、みんなみたいに、すぐ勉強^{べんきょう}、というわけにはいかなかった。そんな時^{とき}、トットちゃん^{うし}の後ろ^{つくえ}の机^{うし}の男の子^{つこ}が立ち上^あがって、黒板^{こくばん}のほう^{ある}に歩^{ある}き出^だした。ノート^もを持^もって。黒板^{こくばん}の横^{よこ}の机^{つくえ}で、他^{ほか}の子^{なに}に何か^{おし}を教^{おし}えている先生^いのところ^{ある}に行^いくらしかった。その子^{ある}の歩^{ある}くのを、後ろ^{うし}から見たトットちゃん^{うし}は、それまでキョロキョロしてた動作^{どうさ}をピタリと止^とめて、頬杖^{ほおづえ}をつき、ジーっと、その子^{ある}を見つめた。その子^{ある}は、歩^{ある}くとき、足^ひを引^ひきずっていた。とっても、歩^{ある}くとき、体^{からだ}が揺^ゆれた。始^{はじ}めは、わざ^{おも}としてい^いるのか、と思^{おも}ったくらいだった。でも、やっぱり、わざとじゃなくて、そういう風^{かぜ}になっちゃうんだ、と、しばらく見ていたトットちゃん^わにわ^わかった。その子^{じぶん}が、自分^{じぶん}の机^{つくえ}に^{もど}戻^{もど}ってくるのを、トットちゃん^{ほおづえ}は、さっき^{ほおづえ}の、頬杖^{ほおづえ}のまま、見^あた。目^あと目^あが合^あった。その男の子^{うし}は、トットちゃん^{せき}を見^{すわ}ると、ニコリと笑^{すわ}った。トットちゃん^{うし}も、あわてて、ニコリとし^{せき}た。その子^{すわ}が、後ろ^{うし}の席^{せき}に座^{すわ}ると、――座^{すわ}るのも、他^{ほか}の子^{じかん}より、時間^{じかん}がかかったんだけど――トットちゃん^ふは、クルリと振^むり向^むいて、その子^きに聞^きいた。「どうして、そんな風^{ふう}に歩^{ある}くのか？」その子^{やさ}は、優^{やさ}しい声^{こえ}で静^{しず}かに答^{こた}えた。とても利口^{りこう}そうな声^{こえ}だった。「僕^{ぼく}、小児麻痺^{しょうにまひ}なんだ」「しょうにまひ？」トットちゃん^なは、それまで、そういう言葉^{ことば}を聴^きいたことが無^なかったから、聞^きき返^{かえ}した。その子^{すこ}は、少し小^こさい声^{こえ}でい^いった。「そう、小児麻痺^{しょうにまひ}。足^{あし}だけじゃないよ。手^てだって……」そうい^いうと、その子^{なが}は、長^{なが}い指^{ゆび}と指^{ゆび}が、くっついて、曲^まがったみたいにな^なった手^てを出^だした。トットちゃん^なは、その左^{ひだり}手^てを見^みながら、「直^{なお}らないの？」と心^{しんぱい}配^{はい}にな^なって聞^きいた。その子^{だま}は、黙^{だま}っていた。トットちゃん^{わる}は、悪^{わる}いこと^きを聞^きいたのかと悲^{かな}しくな^なった。すると、その子^{あか}は、明^{あか}るい声^{こえ}で言^いった。「僕^{ぼく}の名^な前は、やまもとやすあき。君^{きみ}は？」トットちゃん^{げんき}は、その子^{こえ}が元^{げんき}気^{こえ}な声^{こえ}を出^だしたので、嬉^{うれ}しくな^なって、大^{こえ}きな声^いで言^いった。「トットちゃん

よ」こうして、山本^{やすあき}泰明ちゃんと、トットちゃんのお友達^{ともだち}づきあい^{はじ}が始まった。電車^{でんしゃ}の中は、暖^{あたた}かい日^ひ差^ざしで、暑^{あつ}いくらいだった。誰^{だれ}かが、窓^{まど}を開^{ひら}けた。新^{あた}しい春^{はる}の風^{かぜ}が、電車^{でんしゃ}の中^とを^お通^ぬり^こ抜^{ども}け、子供^{こども}たちの髪^{かみ}の毛^けが歌^{うた}っているように、とびはねた。トットちゃんの、トモエでの第一^{だい}目^めは、こんな風^{ふう}に始^{はじ}まったのだった。

Chapter10 海のものゝ山のもの

さて、トットちゃんが待ちに待った『海のものゝ山のもの』のお弁当の時間が来た。この『海のものゝ山のもの』って、何か、といえば、それは、校長先生が考えた、お弁当のおかずのことだった。普通なら、お弁当のおかずについて、「子供が好き嫌いをしないように、工夫してください」とか、「栄養が、片寄らないようにお願いします」とか、言うところだけど、校長先生はひとこと、

「海のものゝ山のを持たせてください」

と、子供たちの家の人に、頼んだ、というわけだった。

山は……例えば、お野菜とか、お肉とか（お肉は山で取れるってわけじゃないけど、大きく分けると、牛とか豚とかニワトリとかは、陸に住んでいるのだから、山のほうに入るって考え）、海は、お魚とか、佃煮とか。この二種類を、必ずお弁当のおかずに入れてほしい、というのだった。

（こんなに簡単に、必要なことを表現できる大人は、校長先生のほかには、そういない）とトットちゃんのパママは、ひどく感心していた。しかも、ママにとっても、海と山とに、分けてもらっただけで、おかずを考えるのが、とても面倒なことじゃなくおもえてきたから、不思議だった。それに校長先生は、海と山といっても、“無理しないこと”“贅沢しないこと”といってくださったから、山は“キンピラゴボウと玉子焼”で海は“おかか”という風でよかったし、もっと簡単な海と山を例にすれば、“お海苔と梅干”でよかったのだ。

そして子供たちは、トットちゃんが始めてみたときに、とっても、うらやましく思っただように、お弁当の時間に、校長先生が、自分たちのお弁当箱の中をのぞいて、
「海のものゝ、山のは、あるかい？」

と、ひとりずつ確かめてくださるのが、嬉しかったし、それから、自分たちも、どれが海で、どれが山かを発見するのも、ものすごいスリルだった。

でも、たまには、母親が忙しかったり、あれこれ手が回らなくて、山だけだったり、海だけという子もいた。そういう時は、どうなるのか、といえば、その子は心配し

ないでいいのだった。なぜなら、お弁当の中をのぞいて歩く校長先生の後から、白い、割烹前掛けをかけた、校長先生の奥さんが、両手に、おなべをひとつずつ持って、ついて歩いていた。そして先生がどっちか足りないこの前で、

「海!」

というと、奥さんは、海のおなべから、ちくわの煮たのを、二個くらい、お弁当箱のふたに、乗せてくださったし、先生が、

「山!」

といえば、もう片方の、山のおなべから、おいもの煮ころがしが、飛び出す、という風だったから。

こんなわけだったので、どの子供たちも「ちくわが嫌い」なんて、そんなことは、言わなかったし、（誰のおかずが上等で、誰のおかずが、いつも、みっともない）なんて思わなくて、海と山とが揃った、ということが、嬉しくて、お互いに笑いあったり、叫んだりするのだった。

トットちゃんにも、やっと『海のものど山のもの』が、なんだか分かった。そしたら、（ママが、今朝、大急行で作ってくれたお弁当は、大丈夫かな?）と少し心配になった。でも、ふたを取ったとき、トットちゃんが、

「わあーい」

といいそうになって、口お押さえたくらい、それは、それは、ステキなお弁当だった。黄色のいり卵、グリンピース、茶色のデンプ、ピンク色の、タラコをパラパラに炒ったの、そんな、いろんな色が、お花畑みたいな模様になっていたのだもの。

校長先生は、トットちゃんのを、のぞきこむと、

「きれいだね」

といった。トットちゃんは、嬉しくなって、

「ママは、とっても、おかず上手なの」

といった。校長先生は、

「そうかい」

といってから、茶色のデンプをさして、トットちゃんに、

「これは、^{うみ}海かい?山かい?」

と聞いた、トットちゃんは、デンプを、ジーっと見て、

「これは、どっちだろう」

と^{かんが}考^{いろ}えた。(色からすると、山みたいだけど、だって、土^{いろ}みたいな色だからさ。でも……わかんない) そう^{おも}思^{おも}ったので、

「わかりません」

と^{こた}答^{こえ}えた。すると、校^{こう}長^{ちょう}先生は、大きな^{こえ}声^{こえ}で、

「デンプは、^{うみ}海と山と、どっちだい?」

と、みんなに聞いた。ちょっと^{かんが}考^まえる間^{いっせい}があ^{うみ}って、みんな一^{いっ}斉^{せい}に、「山!」とか、『海!』とか^{さけ}叫^きんで、どっちとも決^きまらなかった。みんなが^{さけ}叫^おび終^{こう}わると、校^{こう}長^{ちょう}先生は、い^いった。

「いいかい、デンプは、^{うみ}海だよ」

「なんで」

と、^{ふと}肥^きった男^{こう}の子^{ちょう}が聞^{つく}いた。校^わ長^ま先生は、机^まの輪^まの真^まん中^まに立^まつと、

「デンプは、^{さかな}魚^みの身^{こま}をほぐして、細^いかくして、炒^{つく}って作^{つく}ったものだからさ」

と^{せつめい}説^{せつめい}明^{せつめい}した。

「ふーん」

と、みんなは、^{かんしん}感^{こえ}心^{こえ}した声^{だれ}を出^{だれ}した。そのとき誰^{だれ}かが、

「先生、トットちゃんのデンプ、見てもいい?」

と^き聞^{こう}いた。校^{ちょう}長^{ちょう}先生が、

「いいよ」

という^いと、学^{がく}校^{がく}中^{ちゅう}の子^こが、ゾロゾロ立^たってき^きて、トットちゃんのデンプを見^みた。

デンプは^し知^たってて、食^くべたことはあ^いって^はも、今^{いま}の^は話^{なし}で、急^{きゅう}に興^{きょう}味^みが出^でてきた子^こも、
また、自^じ分^{ぶん}の家^{いえ}のデンプと、トットちゃんのと、少^{すこ}し、かわ^かわ^わっているの^おかな?と思^{おも}って、
見^みたい子^こもいるに違^{ちが}い^いな^いか^つった。デンプを見^みにきた子^この中^{ちゅう}には、に^にお^いい^いをか^かぐ子^こもいた
ので、トットちゃん^はは、鼻^{はな}息^{いき}で、デンプが^と飛^{しん}ば^{ばい}ないか、と心^{しん}配^{ぱい}にな^なった^らい^だった。

でも、初^{はじ}め^めてのお^{べん}弁^{とう}当^{じかん}の時^{すこ}間^{すこ}は、少^{すこ}しド^どキ^きド^どキは^はした^けど、楽^{たの}しく^くて、『海^{うみ}のもの
と山^{かんが}のもの』を^{おも}考^{おも}えるのも面^{おもしろ}白^{しろ}いし、デンプが^{さかな}お^わ魚^わって分^わか^かったし、マ^{うみ}マ^{うみ}は、『海

のものと山のもの』を、ちゃんと入れてくれたし、トットちゃんは、（ぜんぶ、よかったな）と、^{うれ}嬉しくなつた。そして、^{つぎ}次に、^{うれ}嬉しいのは、ママの^{べんとう}弁当は、^た食べると、おいしいことだつた。

Chapter11 よく噛めよ

で、普通なら、これで、「いただきまーす」になるんだけど、このトモエ学園は、ここで、合唱が入るのが、また、変わっていた。校長先生は、音楽家でもあったから、『お弁当を食べる前に歌う歌』というのを作った。ただし、これは、作曲が、イギリス人で、歌詞だけが、校長先生だった。というより、本当は、もともとあった曲に、先生が替え歌をつけた、というのが、正しいのだけれど。もともとの曲は、あの有名な、『船をこげよ (Row Boat)』ロー ロー ロー ユアー ボート ジェントリー ダウンザ ストゥリーム メリリー メリリー メリリー メリリー ライス イズ バット ア ドリームで、これに校長先生がつけた歌詞は、次のようだった。よく噛めよ たべものを噛めよ 噛めよ 噛めよ 噛めよ たべものを そして、これを歌い終わると、初めて、「いただきまーす」になるのだった。“ロー ロー ロー ユアー ボート”のメロディーに、“よく、噛めよ”は、ぴったりとあった。だから、この学校の卒業生は、ずいぶん大きくなるまで、このメロディーは、お弁当の前の歌う歌だ、と信じていたくらいだった。校長先生は、自分の歯が抜けていたので、この歌を作ったのかもしれないけど、本当は、「よく噛めよ」というより、お食事は、時間をかけて、楽しく、いろんなお話しをしながら、ゆっくり食べるものだ、と、いつも生徒に話していたから、そのことを忘れないように、この歌を作ったのかもしれない。さて、みんなは、大きな声で、この歌を歌うと、「いただきまーす」といって、『海のものと山のもの』に、とりかかった。トットちゃんも、もちろん、同じようにした。講堂は一瞬だけ、静かになった。